

影の衣と学徒の灯

むかし、霧深き山の奥に、ひとりの学徒が住んでいた。
石造りの狭き室にこもり、毛布をまといながら、夜ごと灯火の下で古の知を読み解いていた。
その灯は小さくとも、闇の中で静かに燃えつづける、魂の火であった。

ある夜、ひとりの女が母に言った。
「私は、あの学徒と結ばれよう」と。
母は沈黙したが、女はためらわなかった。
彼女は黒き衣を取り出し、それを急いで身にまとう。
衣は影のように肌に密着し、彼女の心の奥に潜むものを映し出した。
女は衣を着終えるのももどかしく、学徒の部屋の扉を叩いた。

戸が開かれるや、彼女は彼の胸にそっと抱きつき、言った。
「身分は異なれど、私はあなたを愛している」
学徒は驚きながらも笑みを浮かべ、
「身分違いとは、不思議な言葉だ」と返した。
女は頬を染めて言った。
「そういうことではない。あなたは知の人、私はまだ学ぶ身——
それでも、あなたの灯に寄り添いたいのです」と。

ふたりが窓の外を見やると、
山の崖下に、色とりどりの鉄馬が落ちているのが見えた。
赤、青、黄、緑——それは情熱のかけらが砕けたような、眩い光景だった。
制御を失って墜ちた力の残響は、なお虹色に輝いていた。

女はその光を見つめ、
「いつか、あの色を取り戻したい」とつぶやいた。
学徒は頷き、灯を高く掲げた。
影の衣がその光をやわらかく包み、
ふたりの姿はひとつの輪郭となって、
静かな夜の山道を歩みはじめた。

やがて崖下の鉄馬は、風に吹かれて息を吹き返し、
新たな輝きを携えて、ふたりの行く手を照らすという――。